

Title	鹿児島のカリシタン：サヴィエル四百年祭に因んで
Sub Title	Christianity in Kagoshima
Author	Johannes, Laures
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.26, No.1/2 (1952. 12) ,p.48- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19521200-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鹿兒島のキリシタン

——サヴィエル四百年祭に因んで——

- 一、はしがき
- 二、鹿兒島・市來に於けるサヴィエル
- 三、鹿兒島に於けるパードレ・ガゴ
- 四、イルマン・アルメイダの來訪
- 五、布教の繼續
- 六、島津公のキリシタン憎惡
- 七、薩摩に於ける小西美作守
- 八、ドミニコ會士の傳道
- 九、迫害
- 十、迫害中の傳道行
- 十一、カタリーナ永俊尼殉教者

ヨハネス・ラウレス

引用文献略符號

- Cartas=Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia de Jesus escreverão dos Reynos de Japão & China desde anno de 1549 até o de 1580. Em Evora 1598. 2 Bde.
- Eglauer=(Anton Eglauer), Die Missionsgeschichte späterer Zeiten Der Briefe aus Japan Augsburg 1795~1798. 3 Bde.
- Frois=Luis Frois S. J., Die Geschichte Japans (1549~1578) übersetzt und kommentiert von G. Schurhammer und E. A. Voretzsch, Leipzig 1926.
- Guerreiro=Fernão Guerreiro S. J., Relação anual das coisas que fizeram os Padres da Companhia de Jesus nas suas missões..... nos anos de 1600 a 1609, Coimbra 1930~1942.
- Hay=John Hay S. J., De rebus Japonicis, Indicis, et Peruanis epistolae recentiores, Antverpiae 1605.
- Page's=Léon Page's, Histoire de la religion chrétienne au Japon, Paris, 1869~1870. 2 Bde.

「はし」がき

聖フランシスコ・サヴィエルが「日本の使徒」と仰がれるのは當然のことと謂はねばなるまい。實のところ、彼は日本に於て集團的な改宗を成就するには至らなかつたのであるが、^(註一)彼こそは、最初の宣教師として「日出づる國」に足跡を印し、英雄的日本民族の優れた素質を看破して、その熱烈な讚美者となり、この國に最良の宣教師達を派遣すべきことを決意し、支那の改宗によつて間接的に全日本にキリスト教を齎さんことを望み、その生涯を日本、若くは支那に於て終へんことを念じたのであつた。然し神の御攝理は之と異り、サヴィエルは終に支那入國を成就するに至らず、又再

び日本の地を踏むこともできずに終つた。だが彼によつて種を播かれた日本のキリシタン宗門は、その後輝かしい發展を遂げ、遠からず全日本の改宗が期待される迄になつたが、その殘虐、規模、期間の程度に於て、史上稀なる迫害の嵐は、遂にこの輝かしい教會を殲滅するところとなつた。然も尙多數の人々は、二百五十年に亘る迫害にも係らず、司祭達から受け繼いだ信仰を忠實に守り抜いて、全世界はこの類例なき史實に敬歎せざるを得なかつた。

サヴィエルが礎石を置いた四つの教會は、悲劇的な日本キリシタン宗門を小規模に反映してゐる。鹿兒島の教會は絶えず見捨てられたままであつた。幾多の期待が寄せられた山口の教會は殆んど絶えざる迫害に見舞はれた。豊後の教會は暫く華々しい飛躍を見せたが、長期に亘る死闘の後、跡形もなく潰え去り、最も重要視されてゐなかつた平戸の教會だけが、幾世紀の迫害を経て、今日迄存続するを得たのである。

本稿に於ては、鹿兒島教會の運命を詳論するに留めたい。

(註一) シュールハンメル師によれば、總計千名足らずであつた。鹿兒島、百乃至百五十名。市來、十五乃至二十名。平戸、百八十名、山口への途次三名、山口、五・六百名、豊後、三十乃至五十名。G. Schurhammer S. J., *Der hl. Franz Xaver in Japan*, Schöneck-Beckenried (Schweiz) 1947, s. 42.

二、鹿兒島・市來に於けるサヴィエル

一五四九年八月十五日、聖フランシスコ・サヴィエルは、薩摩の首都鹿兒島に上陸した。領主島津貴久は双手を舉げて彼を迎へ、喜んで、布教し、洗禮を授ける許しを與へた。サヴィエルの日本人伴侶パウロ・ヤジローは、直ちに親族

知己に説教を始め、程なく最初の人々が洗禮を乞ふに至つた。サヴィエル、並びにその同僚、イルマン・フェルナンデス、パードレ・トルレスは、殊に日本語の習得に専念し、能ふる限り布教に協力した。鹿兒島の街のみならず、市來城に於ても、ささやかではあるがより廣範圍な信徒の一團が形成された。市來城主新納伊勢守康久は、キリシタン宗門に好意を示し、妻子の受洗を許した。この熱心な信徒團の中心人物は、新納の家老ミカエルで、サヴィエル去つて後、尙この信徒團が信仰を保持し得たのは、實に彼の模範と熱意の賜物であつた。

鹿兒島は、サヴィエルにとつては、單に通りすがりの街に過ぎなかつた。といふのは、彼の本來の目的地は、ミヤコ、(註一)即ち京都に外ならず、彼は其處で天皇に謁し、キリシタン宗門に導き入れるか、せめても全日本に於て自由に布教し得る允許狀を獲得せんと欲してゐたのである。島津公はサヴィエルに旅行の便宜を計ることを約束してゐたが、何かと口實を設けて滿一ヶ年を空費せしめた。彼はポルトガル船が自領の港に入ることを望んで居り、「聖なるパードレ」の滞在はこの點彼に多大の貢獻をなし得ると考へられた。然るに、唯の一隻もポルトガル船は入港するに至らなかつたので、島津公はサヴィエルに對して冷淡となつた。然もポルトガル船が薩摩でなく、平戸に入港したことは、領主の不滿を一層昂めるに足りた。

その間、反抗は他の方面からも生じて來た。當初、佛僧達は敵愾心を示さなかつたばかりか、説教を聽きに來、サヴィエルを訪ね、或は彼を自らの寺院に招き入れたりした。サヴィエルもその招きに應じたのみならず、屢々自ら進んで佛僧寺を訪ね、彼等と親交を重ねた。禪宗の福昌寺住職忍室の如きは、彼の親友にまでなつた。後述するやう、忍室はキリシタンにはならなかつたが、その門弟の一人は、後年キリシタン宗を信じて他界するに至つた。然し、キリシタン

の數が増加するに及び、漸く佛僧達の友情は消え失せ、領主にこの異國の僧侶の追放を迫るやうになつた。島津公はさなきだにポルトガル船が入港せぬことでサヴィエルに對して冷淡になつてゐたから、先の允許狀を撤回しキリシタン宗の信奉を死罪を以て嚴禁するに至つた。但し彼は、既に受洗したキリシタンを妨げはしなかつた。かくてサヴィエルにとり最早鹿兒島は留るべきところではなくなつた。彼は島津公に乞ふて今やポルトガル船が入港してゐる平戸に赴く許しを得た。途次、彼は市來城のささやかな信徒の一團を訪れ、彼等に有益な説諭を與へ、數々の記念品を残した^(註二)が、それ等の品は、長年彼等のもとに聖なる遺物として保存されることとなつた。彼はミカエルにこの地の小羊の群の世話を託した。鹿兒島のキリシタンの世話は、パウロ・ヤジローが任ずることとなつた。

註(一) サヴィエル、並びに他のイエズス會士の書翰には、常に Meaco と記されてゐる。

(二) ミカエルは、授洗の爲の心得書、主の御受難の物語、詩篇中の七篇、他の祈禱文の寫本、一枚の曆を貰ひ受けた。(シヨアン・ロドリゲス・ツツのリスボン、アジユダ文書館所藏未刊教會史稿本による。L. Joseph Marie Cros S. J., Saint François de Xavier, Toulouse-Paris 1900, Bd. II, ss. 92~93. 所引。)その他サヴィエルは彼に「マリア像、自身の苦行鞭 (Frois. s. 5) 聖十字架の遺物破片、聖水容器、祭壇用天蓋、祭壇前布を残した (Tre lettere annue del Giappone de gli anni 1603, 1604, 1605 e parte del 1606, In Roma 1608, s. 199)」。又ロドリゲスによれば (Cros, op. cit., Bd. II, s. 93) サヴィエルは彼自身の形見として、キリシタン達が絶えず胸に附けてゐるやうにと、使徒信經、イエズス、マリアの御名を自筆した絹の布切を渡したといふ。

三、鹿兒島に於けるパードレ・ガーク

サヴィエルの出立後も、佛僧達の敵意は續いたので、一人のパードレ、イルマンも、この主都に引續き定住すること

はできなかつた。ヤジローは、見受ける處、程なく街から退去を余儀なくされたやうである。^(註一)でもキリシタン達は信仰を忠實に守り、その數も引續く二ケ年間に少からず増加したものと察せられる。島津公がその後間もなく、サヴィエルを甚だ冷淡にあしらつたことに、又受洗を禁ずることによつて、ポルトガル貿易のあらゆる希望を斷ち切つたことに後悔するに至つたことは明らかで、一五五二年(天文二十一年)パードレ・ガゴが二人の同僚と薩摩に到着した際など、一行は領主から甚だ鄭重にもてなされたのである。ガゴの伴侶(イルマン・アルカソヴァ)の報告が眞實なら、當時キリシタンの數は五百に増してゐたことになるが、^(註二)之は當然疑はしいと見なければなるまい。ガゴ及び、二人の伴侶は、程なく豊後への道を辿るやう命を受けたといふことを差し措いても、彼等は誰も日本語に通じなかつたのであるから、この見捨てられた小羊達に殆んど何もなし得なかつたであらう。彼等は一週間鹿兒島に留つただけで、豊後に向つたのである。

註(一) ロドリゲスは、この點に就き、「フランシスコは薩摩を去るに臨み、新たなキリシタンの世話をさせるため、聖なる信仰のパウロ(ヤジロー)を其地に残したが、聖人の出發後五ヶ月にして、佛僧達はパウロを追放した。否、彼等の彼に對する迫害は非常なもので、彼は鹿兒島を追はれて後、長く日本に住ふことを得ず、支那に向つて乗船した。」(Cros, op. cit. II, s. 95) フロイスの「日本史」によれば、ヤジローは、困窮の余り、又は貪慾からか、支那に赴く海賊の仲間入りをし、彼地で悲惨な最後を遂げたと謂ふ(Frois, s. 18)。

(二) Eglauer I. 42, 57.

四、イルマン・アルメイダの來訪

その後九年を経て、再び宣教師が鹿兒島を訪れた。一五六一年(永祿四年)、一隻のポルトガル・ジャンクが薩摩の

鹿兒島のキリシタン(ヨハネス・ラウレス)

小港京泊に入港した。領主島津貴久は歡喜し、自ら赴いて船長メンドーサに、豊後や平戸と同様、薩摩にも船を派遣されたい、又パードレが赴いて、自分の家臣にキリシタン宗を説くことも喜ばしい旨インド總督に書翰をしたためたいと報らせに來た。その後間もなく、メンドーサが數名の部下を連れて、告白のため豊後に旅立つにあたり、島津公はパードレ・トルレス宛の書狀を託し、宣教師の派遣を懇願した。トルレスはその願ひを容れ、一日本人と共にイルマン・ルイス・デ・アルメイダを派遣したが、彼等は一五六一年（永祿四年）から翌年にかけて、冬期を通じ薩摩で活躍した。(註)

アルメイダは、先づ市來城の信徒を訪れた。彼等は十五名を數へ、何れもフランシスコ・サヴィエルから洗禮を授つた者達であつた。アルメイダの訪問は彼等を非常に喜ばせ、キリシタン達は、「聖なるパードレ」に就き、又豊後、京都、その他の傳道地に於ける布教の發展に就いて種々質問を重ねた。その際彼等は、主が、サヴィエルの残した記念品、殊に苦行鞭を通じて爲し給ふた奇蹟的な治癒に就てイルマンに語らふところがあつた。アルメイダは市來で夜を明し、翌朝、城主の二人の息子を交へた幾人もの子供達、又ミカエルが教理を授けてあつた九名の成人に洗禮を授けた。アルメイダは市來から主都鹿兒島への旅路を續け、領主島津公を訪れて、パードレ・トルレスの名に於て、今回の招聘に謝意を表し、伴つた日本人を通じ、デウスの完全、その數へ切れぬ恩寵に就いて説教を行はしめた。島津公は非常に注意深く之を傾聽した。彼は別離に先立ち、インド總督宛の書狀をイルマンに交附し、就中切にパードレ並びに貿易のことを願つた。(註二) ひどい吹雪のため、京泊への旅は二・三日長引いた。メンドーサの船の殆んど全部の乗組員は、嚴寒、又粗惡な食物、殊に非衛生な飲料水のために病氣になつてゐたので、アルメイダは彼等を治療して成果を收めた。幾人かの異教徒も説教を聞きに來り、就中九名は洗禮を乞ふて、受洗した。十四日滞在した後、アルメイダは鹿兒島に引返し

た。

かなりの数のキリシタン達は、主都で非常に忠實にキリシタン教義を聽きに來たが、異教徒達は、佛教に傾倒してゐて、殆んど一人として姿を見せなかつた。そこでアルメイダは、極く著名な佛教の修道僧の幾人かと交らうと決心した。彼は聖フランシスコ・サヴィエルが禪寺福昌寺の僧侶達、殊に住職忍室と親しく交つたことを承知してゐたので、同寺へ足を向けた。住職は謙虚な敬愛すべき學僧で、彼を非常な喜びと愛情を以て迎へた。イルマンは、彼の眼病を治癒することに成功したので、その友情、又愛情を獲得することは困難ではなかつた。この僧侶は、フランシスコ・サヴィエルを知つて居り、^(註三)屢々その語るのを聽き、尊敬はしてゐたが、聖人は少ししか日本語に通じてゐなかつたし、良い通譯を伴つてゐなかつたので、彼はフランシスコの述べたことを殆んど理解し得なかつたのである。そこで彼はアルメイダに多くの質問を發し、幾多の疑點を提示して、イルマンの返答に甚だ満足するに至つた。先の佛僧の友人で南林寺の住職である他の名望ある一僧侶は、アルメイダの來訪を聞き、彼を自分の寺に招き、その後間もなく自ら訪ねて來、遂には彼を自分の寺に住まはせるに至つた。彼はサヴィエルが出入した福昌寺の當時の執事であつたから、聖人を知つてゐたのである。彼は偉大な學僧で、七十ヶ條の質問を用意してゐたが、最初の三ヶ條の答辯だけで非常に満足し、イルマンに秘かに受洗を乞ふ有様であつた。但し彼は、その後も若い弟子達に禪宗を教へる許しを願ひ、徐々に彼等を信仰に導きたいと語つたが、アルメイダは之を望まず、許すこともできなかつた。又他の二人の令聞ある佛僧が訪ねて來たが、彼等は主として科學的な問題に興味を有するに過ぎなかつた。二人の他の僧侶はアルメイダを競つて來訪し、就中一人は領主の面前でキリシタン宗を賞讚する程の勇氣を持ち合せてゐた。それに對し、島津公は、「然り、(キリシ

タン宗門は) 神聖なものだ」と述べたと謂ふ。

かくの如き名望ある人々とアルメイダとの友情、殊に島津公の言葉は、異教徒達に説教を聽く勇氣を起さしめた。三十六名が洗禮を乞ひ、且聞き容れられ^(註四)が、その中には領主側近の二人の名望ある重臣もゐた。アルメイダは一軒の家屋を教會にしつらへたので、ここでキリシタン達は祈禱の爲集會するを得た。

四ヶ月に及ぶ鹿兒島滞在中、アルメイダは尙三度び市來の信徒を訪ねてゐる。最初の折、彼は同所に十日乃至十二日間滞在し、キリシタン達を指導し、相當數の異教徒に説教して、七十名に洗禮を授けた。第二次の訪問にあたり、彼は奥方の希望で城主新納をキリシタンにすべく語らふころがあつたが、彼は、心中キリシタンであるが、敢て國主(島津)の許しなしに洗禮を受けるわけにゆかない。だが主なる神は、必ずやこの領主が許可を與へるに至るを嘉し給ふであらうと述べた。

かく四ヶ月に亘り祝福された活躍を續けてゐる最中に、アルメイダはパードレ・トルレスから、突如豊後へ召喚されることとなつた。彼は自國へ「デウスの教」を弘めたいと願つてゐる大村領主と打合せに行くことになつた。彼の出發が近づいたとの報らせは、多數の志願者達を授洗の決意へ驅り立てるところとなつた。アルメイダは、十分教を授かつた者には秘蹟を授けたが、他の人々には後日を約して慰めた。その中には例の二人の僧侶も居り、アルメイダは、彼等の懇願に、彼等が佛寺を捨てて、豊後へ同道するやう勸告したが、彼等は之を決意することはできなかつた。結局、彼等は職を辭して、寺院を他人に委ねる覺悟あることを表明するに至つたが、イルマンは、翌日既に出發せねばならなかつたので、パードレ・トルレスが授洗の爲、誰かを派遣する迄、洗禮を準備し、期待するやうに諭した。残りの二日間

を利用して、イルマンは市來に最後の訪問をした。新納の息子は、親族と船迄同行して、一同絶えず彼が間もなく再び來訪せんことを乞ひ願つた。

註(一) Frois, s. 118. Cartas, I, 104. 薩摩に於けるアルメイダの活動に就ては、一五六二年十月二十五日附アルメイダ書翰 (Cartas I, 103~108) 並びにフロイス「日本史」(Frois, ss. 118~126.) に詳しい。以下の記事はこの兩史料に基く。G. Schurhammer S. J., Kagoshima, in Die Katholischen Missionen, Freiburg 1919~1920, ss. 44~45. 参照。

(二) フロイス「日本史」(Frois, ss. 127~128) は、鳥津の二書翰の譯文を掲げてゐる。最初の書翰で、彼は、戦亂の爲、アルメイダを十分待遇できなかつたこと、又、同じ理由から、マカオ船を海賊船から十分護り得なかつたことに就いて謝罪してゐる。第二の書翰で、鳥津はアルメイダの來訪に満足の意を表し、バードレ、クリシタン宗門、ポルトガル人を過分に失する口調で賞め讃へ、バードレ、並びにポルトガル人を答謝すべきことを申し出た。

(三) 「日本史」(Frois, s. 122) によれば、サヴィエルの友人忍室であつたと謂ふが、之は誤りである。先にフロイスは (Ibid., s. 7) 忍室は(一五五〇年後)「尙數年」生き永らへ、洗禮を受けないで死んだと記してゐる。彼に關する之等のことを、アルメイダは鹿兒島訪問に際し、サヴィエルにも逢つた忍室の數名の弟子達から聞いたのである。従つて忍室は、アルメイダが鹿兒島を訪れた時には既に死去してゐたことは確かである。事實彼は、福昌寺住譜に記載されてゐるやうに、一五五六年(弘治二年)に世を去つてゐる。Laures, Notes on the Death of Ninshitsu, Xavier's Bonze Friend, in Monumenta Nipponica, Bd. VIII (Tokyo 1952), ss. 407~411.

(四) アルメイダ書翰による。「日本史」(Frois, s. 124) によれば三十八名。

五、布教の繼續

その後宣教師が再び薩摩に赴く迄には、長い年月を経たやうである。一五七一年(元龜二年)に逝去した貴久や、そ

の息義久公の切なる催促にもかかはらず、イエズス會士は薩摩に於ける布教を基礎づける爲に歩を進めることもなく、見捨てられたキリシタン達を定期的に訪問することすら放置した。パードレやイルマンの教が乏しかつたこと、又九州、中日本の各地に於ける布教活動が、薩摩の傳道を妨げたことは事實であるが、大村、五島、有馬、天草等他の多くの地方でこの間新たな信徒團が形成されてゐるところを見れば、決して不可能であつたとは謂へまい。おそらくパードレ達は、明らかに有利なマカオ貿易のことを先づ念願に置いてゐた島津公の好言令句を信用しなかつたものと思はれる。尙又、サヴィエル到着以來、布教を妨げ、他の何處に於けるよりも勢力を有してゐた佛僧達の敵意ある態度も、明らかに次の理由として擧げることができる。

一五七七年(天正五年)、遂に布教長は鹿兒島の領主を訪ねさせるべく、イルマン・ミゲル・ヴァスを派遣した。島津義久公は、彼を甚だ好遇し、キリシタンの教義、習俗に就いて多くの質問を發し、イルマンの答辯に大いに満足の意を表した。彼は更に自領にキリシタンを得たいと希望し、領地に教會の建築を許し、その爲地所を寄進すると約束した。當時、市來の信徒團は瓦解してゐたものらしく、何れにせよ、右イルマンが彼地を訪れたとは記されてゐない。彼は、サヴィエルから受洗した數名のキリシタンに逢つたこと、而して彼等は聖人の苦行鞭と書き物の奇蹟的効力に就いて話して呉れたと報じてゐるに過ぎない。このことから、當然彼等は先の市來の信徒團のキリシタン達であつたことが判明する。更にイルマンは、一城の主である十六才の若い貴人が夜中に來訪したことを述べてゐる。彼はイルマン・アルメイダから受洗した者で、遂にキリシタンであることを表明できたことを喜んだ。又彼は常にその前で祈りを捧げることにしてゐるマリア像を所持してゐた。之等の事情から、彼は、サヴィエルから妻子の受洗した新納氏の息であることが明

らかとならう。イルマン・ヴァスは、その若者は十六才で、アルメイダから授洗したと明白に述べてゐるところから、彼は、アルメイダが一五六一年（永祿四年）十二月に授洗した新納の二人の子供の一人であるに相違ない。當時、新納の長男は、既に十七才で、サヴィエルから洗禮を受けてゐた。彼、及び父新納氏が、その間死去して、弟が市來を領有するに至つたかどうかは判らないが、何れにせよイルマン・ヴァスの報告から、右若者は公然とキリシタンであることを表明できず、胸中信仰を守つてゐたことが判明する。恐らくは、島津公は新納氏の男がキリシタンであることを承知してゐて、爲に相續を引留めたに相違なからう。若し之が眞實ならば、新納氏の弟が、市來キリシタン宗團を解消することによつて、自らもキリシタンであることのあらゆる疑惑を除去しようとしたものであることが諒解できよう。何れにしても、市來城に於ては、最早、纏つたキリシタンの信徒團が存在しなかつたことは十分確かなことと思はれる。

イルマン・ヴァスは、その訪問に際し、更にサヴィエルと親交のあつた一人の甚だ名望ある佛僧に逢つてゐる。それは、一五六一年から翌年にかけて、アルメイダと親しく交つた福昌寺住職に外ならぬことは確實である。南林寺住職であつたアルメイダの第二の友人に就いて、イルマン・ヴァスは何等述べてゐないところを見ると、彼はその間、既に他界したものと見做される。彼は、アルメイダが訪ねた時、既に七十才に達してゐた。右佛僧は、イルマンの訪問を非常に喜び、その聖なる友人サヴィエルに就いて種々訊ねるところあり、自分は日本の總ての宗派を知つてゐるが、何等満足を見出し得ないと語つた。彼は數日、非常な關心を以て説教を聞き、極めて満足の意を表し、遂に洗禮を乞ふに至つた。然し、イルマンの出發は目睫に迫つてゐた爲、徹底的に準備させる暇なく、イルマンは彼に靈名と、暗記するため必要な祈禱文を書き残し、授洗の爲誰かを派遣することを約束したに過ぎなかつた。(註)

イルマン・ヴァスは旅を終へてから、薩摩に於ける好ましい見通しに就いて報告するところがあつたので、パードレ・バルタザール並びにイルマン・アルメイダを同地方に派遣することの決定を見た。^(註三)遺憾ながら、彼等は直ちに出發せず、一年を経て、不可能であることが明らかとなつた。島津氏の爲、日向を追はれた伊東氏は、親族である豊後の大友宗麟のもとに避難して來た。宗麟公は、受洗(一五七八年八月二十八日)後間もなく、強力な軍勢を従へて日向奪回の軍を進めた。緒戦に勝つた後、彼は決定的に慘敗を喫し、急遽豊後へ退却することによつて、辛うじて余命を保つを得た。島津氏は、勇猛果敢な肥前の龍造寺隆信と結んで、大友氏に對する戦ひを續行したので、大友領では相次ぐ敗戦に、人心甚だ動搖した。而して龍造寺氏が島津勢を壓倒せんとするに及び、島津は強力な信長の仲介により大友氏と和睦し、龍造寺に對し、殲滅戦を展開した。^(註三)

この戦亂は薩摩に於ける布教の強化を妨げてゐたが、今や島津義久は更めてパードレのこと、又ポルトガル人との貿易關係を結ぶことに努力するやうになつた。彼はイエズス會巡察師アレッサレドロ・ヴァリニアーノをその京都への旅路の間、再度來訪せしめ、インド總督宛の贈物を渡し、自領の主な街々に教會を建て、自由に布教し、授洗することを許すと約束した。^(註四)ヴァリニアーノが京都からの歸途再び薩摩の港を経由した際、島津は彼に贈物を届けた。準管區長ガスパール・コエリョは交渉を續け、鹿兒島に於ける教會地所の寄進を約束された。大友宗麟すら、島津氏の敵であつたにかかはらず、パードレ達が自分の喪失した國々のキリシタンの世話をみる事ができようといふので、彼等の薩摩入國に百方手段を盡さうと激勵するところがあつた。^(註五)

そこで一五八三年(天正十一年)、既に司祭となつてゐたルイス・デ・アルメイダが、繼續布教を確立すべく、度々鹿

兒島を訪れた。島津義久は彼を親しくもてなし、独自の住院を建てることを許したが、パードレは佛僧達の反抗に鑑み、まだ公然と説教したり授洗することは許されなかつた。その間、福昌寺の住職が死んだが、パードレが聞いたところによれば、彼は死に先立ち、受洗を常に幾度となく延期したことを切に後悔してゐたと謂ふ。^(註六) サヴィエル時代の古いキリシタン中、宿主の娘マリアがまだ生き永らへてゐた。パードレ・アルメイダは、秘かに新たな信徒團を作らうと努力したが、佛僧達の氣附くところとなり、加ふるに、領主が病氣になつた時、彼等は之をパードレの滯留に歸罪し、彼が街にゐる限り、恢復は望めないと言つた。そこで島津公はアルメイダに、暫くこの反抗の嵐を避けてもらひたいと親しい態度で懇請したが、友好的な人々は、義久はきつと間もなくパードレを呼び戻すだらうと語つた。事實パードレは、程なく再來し、領主から以前にも増して親しくもてなされた。だが、島津義久と極く親しい關係にあり、パードレの爲格別執成すところのあつた一人の貴人は、或る夜二人の僧侶の手にかかつて自宅で殺害されるに至つた。島津公は、殺害者達を死刑に處したが、かくの如き事情のもとでは最早パードレは街に留つてはおれなくなり、島津公は親しげな言葉で、差し當り、パードレの退去を求めたが、その住院は保護すると約束した。^(註七)

註(一) 一五七七年十月七日附、ミゲル・ヴァス書翰、*Cartas I*, 399~400.

(二) *Ibid.* I, 399 v.

(三) *Eglauer III*, 41; *Cartas II*, 19v~20.

(四) *Eglauer III*, 41~42.

(五) *Ibid.* III, 162~163; *Cartas II*, 54 v.

(六) 前掲、*Schurhammer, Kagoshima*, s. 46.

鹿兒島のキリシタン(ヨハネス・ラウレス)

(十) Cartas II, 92~93 v.; Eglauer III, 223~228.

六、島津公のキリシタン憎悪

一五八四年(天正十二年)、島津氏と龍造寺氏は、島原で決戦を始めた。龍造寺氏は戦に敗れ、且戦死した。かくて島津氏は、再び豊後のキリシタン大名大友氏に對する戦を始めるに及び、薩摩に於ける布教の再開は最早考へられなくなつた。島津公はそれ迄、少くとも外面的にはキリシタン、並びにパードレに友情を示して來たのであるが、今や彼等は全く異つた立場から認めることとなつた。島原の戦に際し、島津義久の弟家久は、キリシタンなる有馬晴信を、宿敵龍造寺氏に對する忠實な同盟者として強力に援助するところあり、龍造寺氏の敗北戦死により、有馬、大村のキリシタン宗門を明白なキリシタン憎悪の暴君の手から解放した。だが結局はキリシタン達は主君を取り替へたに過ぎず、島津は龍造寺氏同様キリシタンを好まなかつた。家久は戦勝を自ら尊崇する神々の賜物と思ひ、戦後は、有馬氏に棄教を勧告し、彼が斷乎として拒絶するや、家久及び兄義久は、戦勝に際し、有馬の有名な寺院を再建し、有馬にその損害を賠償するつもりである。然し有馬がかくすることを拒むなら、自ら著手し、その費用として島原、三會の兩城を要求すると語つた。そこで有馬公は城を引渡すより外仕方がなかつた。又家久の家臣は、十字架數基を伐り、二三の教會を侮辱したが、家久は、かくの如きは國主の意志に反すること、兄義久は犯人を厳しく叱責するのであらうと言つた。事態は逼迫したが、イエズス會布教長は、素知らぬ風をして鹿兒島にイルマン・ダミヤンを派遣し、島津義久に有馬に於けるその力強い保護を謝し、併せて、彼の領内で獲得したキリシタンの居住地の保護を乞はせることに決めた。(註一)

對大友戰に、島津氏は勝利に勝利を重ねた。かくて征服された地方のキリシタン達にとり、事態は悪化して行つた。有馬は又しても棄教を催促され、天草本土のキリシタン領主も同様の運命に見舞はれたが、兩人共、棄教せんよりは蓋し死を欲すると答へた。隸屬した地方のキリシタン達は、島津氏から、大友氏の一味であるとの嫌疑を受け、豊後征服後は、キリシタン宗門を根絶し、パードレ達を追放するのだと脅迫された。(註二)ここに於て、遂に大友氏は強力な秀吉に援を求めたので、秀吉は短期間の遠征を以て、屈辱的に島津家を降し、大友家には舊領豊後のみを所領せしめ、九州の他の地方を思ふが儘に再分配した。有馬、大村、天草のキリシタン領主はささやかな自領を保持することとなり、キリシタンの伊東氏は舊領日向の一部を恢復した。豊前のより良い地方は勇敢なキリシタン武將黒田孝高が所領した。筑後で、秀吉は大友宗麟の婿でキリシタンの毛利秀包に重要な領地をあてがふに至り、ここに大九州の殆んど半ばはキリシタン領主の掌中に歸することとなつた。殊に今や國內全般に平和がみなぎり、最早過去幾十年に於けるが如き布教の妨げは消失した。そこでパードレ達は、遂に薩摩にも永續的布教を成就すべき機が到來したと考へた。折も折、晴天の霹靂とも謂ふべき、一五八七年(天正十五年)七月二十五日の秀吉のパードレ追放令が布告された。それに少しく先立つて九州キリシタン宗門の二大柱石とも稱すべき大村純忠、大友宗麟が逝去した。秀吉はおそらくこの理由からもパードレに對する従來の假面をぬぎ捨てたのである。追放令の直前、秀吉はキリシタン大名の第一人者高山右近に棄教を迫つたが、彼が憤激してこの無理な要求を却けるや、その所領を剝奪した。法令によれば、パードレ・イルマンは總て二十日以内國外に退去し、教會は取毀ち、キリシタン並びにキリシタン領主は日本の宗教に立替るべしといふにあつた。この法令が徹底的に貫遂されるに於ては、教會の存續は危ぶまれたであらう。

だが實際には、秀吉のこの追放令は死文と化した。臆病な大友義統を除いて、ただの一人としてキリシタン領主の信仰を棄てる者なく、暴君も彼等を更にわづらはせることはなかつた。五畿内の教會は破壊されたが、九州では存続した。五畿内では、總ての宣教師が退去を余儀なくされた爲、差し當つて布教は停止したが、パードレ・オルガンチーノは、二人の日本人同僚を伴つて小豆島に潜伏し、時折五畿内のキリシタンを訪れた。爾余のパードレ達は、秀吉の命によりマカオに放逐さるべく平戸に集合したが、實際は國內に留り、キリシタン領主の領内に分散し、日本風の衣服を纏ひ、教會の表門を閉じ、或程度の制限を忍ばねばならなかつたが、その他は従前通りの活躍を續けた。大きな集團改宗は停止したが、今やパードレ達はこの時期を利用して、多數の名前だけのキリシタンに過ぎぬ者を徹底的に教育することに専念した。有馬氏に回復された島原、三會城では改宗運動も促進し、全天草諸島は信仰に導かれた。

だが差當り薩摩に於ける布教の再開は問題とならなかつた。敵意を懷いた佛僧達は、パードレの滞留を秀吉に密告してゐたらうし、何れにせよ辱しめを受けた島津氏は、追放された宣教師達を寛大に扱ふことによつて、更に暴君の感情を害することはできぬことであつたからである。事實、一五八七年(天正十五年)から一五九五年(文祿四年)にかけてのイエズス會年報は、薩摩に關しては全く記して居らず、従つて、この年間に同地方には宣教師が居なかつたものと察せられる。一五九一年(天正十九年)ヴァリニアーノ使節が秀吉に謁見したため、パードレ達は、より自由に再び九州で活動することが出来るやうになり、五畿内でも布教は再開して効果を收め得た。事實、一五九四年(文祿三年)から一五九六年(慶長元年)にかけては、信長、秀吉が教會を極めて寵愛した最盛期以上に上流階級の改宗が行はれた。そこでパードレ達は、遂に見捨てられてゐた薩摩のキリシタン達に思ひを致すことができるやうになつた。彼等は一五九五年(文

祿四年)に、告白のためパードレの派遣を願つてゐたが、その願ひは聞き容れられた。パードレはその上三百名の異教徒を教會に導くことができた。少しおくれて、日本人の一イルマンもこの信徒團を訪れ、數名に洗禮を授けてゐる。^(註三)翌年、又しても一人のパードレが薩摩を訪れ、シャムとマニラへ移住するキリシタン達の告白を聞いた。^(註四)

一五九八年(慶長三年)九月十六日、秀吉が世を去つて、遂にパードレ達は再び何の妨げもなく、自由に説教ができるやうになり、その結果、會てみられなかつた程のキリシタン宗への集團改宗が行はれた。一五九九年から一六〇〇年の十月にかけて二ヶ年に、七萬人以上が受洗した。多數の異教徒の領主達はパードレの派遣を願ひ、他の領主達はキリシタン宗門を領内に弘めることを許したので、パードレ達の訪問を受けた。彼等の中では、眞先に薩摩領主(島津義弘)が擧げられる。當時は、まだ明らかに布教活動は始つてゐなかつたが、島津側のもてなし振りは、全く友好的であつた。^(註五)

註(一) Cartas II, 119 v.~120; Eglauer III, 297~298; Schurhammer, Kagoshima, s. 46.

(二) Cartas II, 190 v.~191.

(三) Hay 248~249.

(四) Ibid. 409~410.

(五) Ibid. 532.

七、薩摩に於ける小西美作守

秀吉は嗣子として未成年の秀頼を残した。而して彼の成年に達する迄、徳川家康を筆頭とする五名の重臣が攝政會を

牛耳ることとなつた。だが豫想に違はず、強力な家康は、間もなく若い秀頼を驅逐し、自ら支配權を相續せんと試みるに及び、彼と他の奉行達は一六〇〇年雌雄を決することになつた。この關ヶ原の合戦に決定的な勝利を収めた家康は、事實上日本の君主となつた。島津義弘は、家康に對抗して戦つたので、勝者の怒りを感じてゐた。家康の不倶戴天の敵であり、キリシタン大名の最有力者小西行長は、勝利者に捕縛され、處刑された。小西の領分(南肥後)は、その競争者であり、敵であつた加藤清正に征服された。加藤は、小西の本據宇土城の降伏にあたり、守備兵の生命は許したが、城主なる小西の兄弟は處刑させた。これと同じ運命から免れるべく、第二の城八代城主で婿にあたるディエゴ・小西美作守は、五百名の武士を伴つて薩摩に逃れようと決心した。八代に駐在してゐた二人のパードレは彼に従つた。薩摩の佛僧達は彼等の入國に反對したが、でも或るキリシタンに好意的な武士の盡力で入國に成功した。パードレの一人は薩摩に留らうと計つたが、この點に就き、島津公は未だ相談を受けて居らず、殊に僧侶達を不必要に刺戟するところとなり賢明な策ではないことが明らかとなつた。折から巡察師ヴァリニアノからも、二人のパードレが薩摩に滞在するとは、近々行はるべき領地の再分配に、家康の島津に對する感情をそこねるかも知れぬとて、彼等を長崎に赴かせる指令が到着した。^(註二)

遂に家康公と島津氏との間には協定が成立した。島津氏は舊領を保つを得たが、現領主義弘は、息忠恒(一六〇六年(慶長十一年)以後、家久と稱す)に地位を譲るを余儀なくされた。一六〇一年(慶長六年)には、一イルマンがディエゴ小西と、彼のキリシタンの武士達を訪問し、一ヶ月、彼等のもとに留つた。彼は異教徒達からも敬意を以てもてなされた。^(註三)惜しむらく、ディエゴは翌年世を去つた。彼は死に先立ち、十歳の息ディエゴに、采邑、否生命にかけても信仰

を堅持すべきことを諭した。而して彼の一人娘が、異教徒に嫁がせられることのないやうにと、デイエゴは妻に、娘と共に長崎に避難するやうに願つた。彼の遺骸は、その切なる希望により、長崎に移された。息ディエゴは、島津公から、父の采邑を保持することを許可された。右埋葬が終つてから、巡察師ヴァリニアノは、遺族を慰問すべく、一日本人パードレ(註四)(多分、パードレ・ルイス・ニアバラ)を薩摩に派遣した。彼は同地のキリシタン武士達の大きいなる慰めとなる中、二ヶ月滞在した。

註(一) グレイロ (Guerreiro I, 142) によれば五百名、一六〇一年二月二十五日附パードレ・ヴァ・レンティン・カルヴァリオの書翰 (Hay 557) によれば、千五百名。

(二) Guerreiro I, 140~142; Hay 557~558.

(三) Guerreiro I, 186; Hay 603~604.

(四) *Litterae Societatis Iesu, anno 1602 et 1603, Moguntiaci 1607, ss. 173~175; Guerreiro I, 186~187.*

八、ドミニコ會士の傳道

薩摩に於けるかくの如き多數のキリシタン武士の在留は、同國の見捨てられたキリシタン達の自意識を昂めさせたこととは疑ひなく、島津公もキリシタン宗門に對し、より一層の自由を許すやうになつた。加之、この頃日本の諸侯、とりわけ家康はフィリピンとの貿易關係を結ぶことに専念し始めた。かくて島津義弘は、イスパニア船を自領の港に引入れることを期して、ドミニコ會士を薩摩に招いた。彼等は一六〇二年(慶長七年)甕島に居を定め、日本語を修め、一六〇五年(慶長十年)には同所に簡素な小聖堂を設けた。彼等の依頼に基き、島津は一六〇六年(慶長十一年)、港街京

泊に教會の建築用地を寄進した。パードレ達は彼等の教會で説教し、國內を巡教し、多數の異教徒に洗禮を授けた。彼等は常に、江口 (Yeguchi) のディエゴ・小西並びにその母の許で客遇され、彼等の家屋を提供されてミサ聖祭を行ふを得た。だがパードレ達は、甌島の教會は廢止したものやうである。(註一)ドミニコ會士の到着により、長い間見捨てられてゐた薩摩のキリシタン達は、遂に永續的靈父を得たかに思へたが、それも暫くしか續かなかつた。島津義弘がドミニコ會士の領内傳道を許したのは、特に彼が魅惑的なマニラ貿易の現世的利益を豫期したからのことであつた。彼が殆んど定期的に例年訪問したイエズス會のパードレ達を常に手厚くもてなしたのも、かうした理由からであつた。でも彼は、領内にそれ以上キリシタン宗門の弘布するを望まず、特に上流階級の改宗を嚴禁してゐた。(註二)實のところ、彼はディエゴ・小西及びその家臣の武士達にキリシタン宗門を自由に信仰することを許しはしてゐたが、彼等は決して永續的宣教師を有してゐたわけではなく、時折、イエズス會士やドミニコ會士の訪問を受けたに過ぎない。されば、老ディエゴ・小西が死に先立ち、息子に信仰を堅持するやう訓戒し、妻と娘に長崎移住を警告したのは理由のないことなく、二年を経たぬ中に義弘は若いディエゴ (まだ十四歳であつた) に棄教を迫つた。彼は、小西に、同家の親族の娘を娶はせ、より一層有力な地位、又多大の領地を與へようと企て、その代りに信仰を棄てることを要求した。然るに右若者は憤激してこの不當な要求を拒絶し、母親も頑として動じなかつた。かくて、差當り彼等は放任されることとなつた。(註三)

一六〇五年 (慶長十年) 例年の如く、一イエズス會士が領主を訪問した。彼は亦三十七名に洗禮を授けた。川邊 (現今カワナベと謂ふ) では、市來の曾て家老であつたミカエルの息子に逢つた。彼はサヴィエルが父に残して行つた聖十

字架の遺物破片、ロザリオ二環、聖水容器を非常に畏敬して保存してゐた。彼の姉はサヴィエルから洗禮を授つてをり、今は日向で異教徒の間に住ひ、同様二三聖人の遺品を所持してゐた。彼がパードレに語つたところによれば、彼は父から受け繼いだサヴィエルの遺品として、以前にはまだこの他にマリア像、絹の祭壇用天蓋、祭壇前布を有してゐたが、領主はそれ等を彼の手から差押へた。そこで彼はマリア像をフィリップに賣却し、祭壇裝飾の絹布で子供達の衣服を調製したところ、四人の子供は醜惡な病氣にかかつて死に、五人目の子供は狂人となつたと謂ふことであつた。事實右冒瀆者は、以上の出來事の中にデウスの懲罰を認め、今やパードレの許を訪れて過誤を告白し、説教を聞き、家臣がキリシタンになることを望み、自らも受洗したいと希望を述べたが、當時は之を決定することはできなかつた。(註四)

註(一) Jacinto Orfanel O. P., *Historia eclesiastica de la Christianidad de Japón*, Madrid 1633, ff. 1~4; Diego Aduarte O. P., *Tommo primero de la historia de la provincia del Santo Rosario de Filipinas, Japón, y China, de la sagrada orden de predicadores, zaragoça 1693*, ss. 249~257; *Pagès I*, 160.

(二) Orfanel, *op. cit.* f. 4 v.

(三) João Rodriguez Giram S. J., *Carta annua da Vice-provincia do Japão do ano de 1604*, Coimbra 1932, ss. 15~18; *Guerreiro II*, 241~243.

(四) *Tre lettere annue del Giappone*, ss. 197~200; *Guerreiro II*, 241~243. この兩史料によればパードレは曾てサヴィエルが客遇されたと同じ家に宿したと謂ふ。サヴィエルの宿主が市來城の家老新納伊勢守康久であつたことは疑ひないが、ここではパードレは、カワム Tre lettere には Canabe, *Guerreiro II* には Cabanave と轉化)で家老ミカエルの息に逢つたと明記されてゐる。川邊は鹿兒島の西南三十二軒にあつて、市來と同一でないことは確かである。市來(正確には東市來)は鹿兒島西方約二十四軒の地點である。既に他の個所で述べたやうに(上述五八一五九頁)市來の信徒團は、イルマン・ヴァスが

薩摩を訪れた一五七七年(天正五年)には最早存在してゐなかつたのである。多分新納の家老ミカエルはその前後に川邊に移つてゐたものと考へられよう。又、川邊の領主が異教徒と述べられてゐる事情は、サヴィエルやアルメイダから受洗した新納の息子の一人を指してゐるのでないことを明らかに示してゐる。

九、迫 害

武士階級に對する嚴重な受洗禁止令にもかかはらず、尙若干の勇敢な武士達は秘かに洗禮を受け、その中には、平佐(今日の川内^{センダイ})領主の家臣、レオ・キチエモン(吉右衛門、又は七右衛門か)がゐた。領主はこれを知り、早速彼に棄教を迫り、數日猶豫を與へたが、レオは頑として動ずる色なく、死の準備をした。一六〇八年(慶長十三年)十一月十七日、彼は武士として自害することを拒絶したので、領主の命により、自宅で斬首された。更に別の武士は信仰の爲召喚された。彼は棄教せんよりは寧ろ死を選ぶことを決意してゐたにかかはらず、生命を許されて放謫された。當時島津義弘はドミニコ會士を國內に招いたことを後悔し始めてゐた。殊に、期待された貿易船は來らず、家康の態度は年を経るにつれ不愛想となつた。だがパードレ達を公然と國外に追放することを敢てせず、彼は布教長パードレ・モラーレスに、家康はパードレ達がまだ來訪しないことを不平に思つてゐると述べ、その政廳へ罷り出るやう勸説した。而してパードレ・モラーレスの不在中、島津義弘はキリシタン達に棄教を迫り、パードレ達との一切の交渉を禁止した。一六〇九年(慶長十四年)春、彼は遂にドミニコ會士を國外に追放するに至つた。^(註一)

島津義弘の長男家久は、キリシタンの馬術の指南役アンドレア・小笠原の有徳な日常に深い感銘を受けて、信仰のことに甚だ好意的であつた。家族は之を知つて、その地位に鑑み、國教を守るやう勸告し、彼は脆くも服従するに至つた。

だが彼は小笠原に棄教を迫ることはできず、かくも忠實な家臣を見捨るに忍びなかつたので、差當り彼が信仰生活を營むことを許したが、彼は寧ろ追放に赴くことを選んだ。この頃、ディエゴ・小西も更めて棄教を勸告されたが、動ずる氣色はなかつた。一人のイエズス會士は薩摩を訪れて、彼を慰め、激勵し、領主をも訪問した。彼は親しくもてなされたが、小西の信仰の自由を獲得するには至らなかつた。そこで小西は家臣と共に長崎への追放行に就いた。^(註二)而も尙イエズス會士達は、一六一二年(慶長十七年)、一イルマンを薩摩に派遣し、領主を訪問させた。彼は何時ものやうに客遇され、數名の異教徒に授洗するを得た。^(註三)

註(一) Orfanel, op. cit., ff. 3 v.~8 v; Aduarte, op. cit., ss. 320~327; Pages I, 162~165.

(二) Lettera annua del Giappone del 1609 e 1610, Milano 1615, ss. 64~68.

(三) Lettera annua del Giappone del 1612, Roma 1615, s. 18.

十、迫害中の傳道行

一六一四年(慶長十九年)の大迫害の後に於ても、パードレ達は見捨てられた薩摩のキリシタンを放置することはなかつた。彼等の中にはキリシタン武士は居らず、當初全日本に於て、下層階級の信徒が信仰の爲に苦しめられることになつたので、薩摩では、長年キリシタンの血は流されなかつたやうに見受けられる。島津氏は當初から余儀なくして徳川家に服したのであつたから、キリシタンの殲滅戰に格別の熱意を示して將軍の好意を獲得するといふ點では明らかに輕視してゐた。僅かなキリシタン達は、狂信的異教徒に取圍まれて堅く信仰を保つてゐた。イエズス會士パードレ・モレホンは、一人のパードレが(一六一五年乃至一六一九年の間)訪問した際、サヴィエルから受洗し、聖人の形見と

して聖畫、聖水容器、苦行鞭を敬仰してゐる二人の老人に逢つたことを報じてゐる。^(註一) 彼等が、市來の敬すべき信徒達であつたことは明らかである。一六二〇年(元和六年)、日本人パードレ・シクストゥスが薩摩を訪れ、キリシタン達が信仰の爲血を流すことを熱望し決意してゐるのに接した。^(註二) 一六二二年(元和八年)の訪問の際には、キリシタン達が、特に時に訪れるパードレ達、又マリア講や、父子二人のキリシタンの熱意によつて驚くべく信仰を保つてゐたと述べられてゐる。右父子といふのは、信仰の爲、郷里を追はれ、薩摩に逃れて來た者であつた。彼等は祝祭日や小齊大齊の日が判然としなくなつたので、確實に戒律を犯さぬためにと十五年間肉食を斷つてゐた。^(註三)

註(一) P. Morejón S. J., Historia y relación de lo sucedido en los reinos de Japón y China desde el año 615 hasta el de 19, Lisboa 1621, s. 50.

(二) Relazione di alcune cose cavata delle lettere scritte ne gli anni 1619 & 1621 dal Giappone, Roma 1624, s. 104.

(三) Lettere annue del Giappone dell'anno 1622, et della Cina del 1621 & 1622, Milano 1627, ss. 70~71.

十一、カタリーナ永俊尼殉教者

一六二四年(寛永元年)にもイエズス會士達は薩摩を訪問した。彼等は領主の義母カタリーナの雄々しい信仰に感動した。彼女は教會の支柱であり、その言行を以てキリシタン宗門を促進せしめてゐた。彼女の心を翻さうとする佛僧達のあらゆる試みを、彼女は今後再び彼等の訪れ來ることを嚴禁することによつて終止せしめた。江戸に於ける(一六二三年十二月四日)大殉教の報が鹿兒島に達するや、島津家久は、義母カタリーナが尙もキリシタン信仰を守り抜くかと幾度となく質さしめた。之を鎮めるため、彼女は自ら政廳に赴き、家久並びに參集した武士達の前で、自分がキリシ

タンであること、而してキリシタンたることを守り抜く決意であることを開陳した^(註二)。それ以後、彼女は最早わづらはされることもなく、當時はまだキリシタンの鮮血はおそらく流されなかつたもののやうである。

日本に於ける迫害は、その間年々苛酷さを加へ、將軍家光は、諸大名に嚴重なキリシタン斷壓を遂行することを常に斷乎として要求してゐた。かくて島津家久も、強硬手段に訴へることを余儀なくされた。一六三二年(寛永九年)、彼は義母カタリーナ(日本側の文献では、堅野^{カタテ}とも永俊とも呼ばれる)を、二十名のキリシタンなる男女家臣と共に種子島に放逐するに至つた。一六三八年(寛永十五年)、彼女の娘である喜入忠政、並びに基多村越中守の妻の二人も母のゐる種子島に従はねばならなくなつた。一六三九年(寛永十六年)、喜入氏妻女の四人の娘は、三名の侍臣、七名の侍女と共に種子島へ送られた^(註三)。一六三三年(寛永十年)には、薩摩でも最初の血腥い迫害が起り、キリシタンの矢野主膳、並びにその子供達が犠牲となつた。彼等は櫻島で火炙りに處せられた。當時、かの著名なキリシタン武將明石掃部の息ジュアンも捕縛され、關東へ送られた^(註三)。一三三八年(寛永十五年)には、永俊のキリシタン家臣皆吉長右衛門が、妻及び四人の子供と共に種子島から鹿兒島へ拘引された。彼の父親が島原の亂に際し、有馬・天草のキリシタンに加但したからであつた。彼等が殺害されたかどうかは史料に明らかでない^(註四)。薩摩キリシタンに關する最後の報告はモンターヌスに見られる。それによれば、一六六〇年(萬治三年)鹿兒島で三名のポルトガル人、十一名の日本人宣教師が火炙りの刑に處せられたと謂ふ^(註五)。之等の宣教師が誰であつたかは記されて居らず、殊に、當時日本に尙宣教師が居り、十一名もの日本人宣教師が見出されたといふことは信じられないであらう。多分それ等は、マカオ、又はマニラから潜入して來た三名のヨロロッパ人司祭と、十一名の日本人キリシタンが鹿兒島で捕へられ、處刑されたことを指すのであらう。

一六三二年(寛永九年)以來、少くとも三度、宣教師達が外國から薩摩へ潜入を試みたことは明らかであるが、就中二度は直ちに捕吏の手にかかり、處刑のため幕府に引渡された。一六三二年(寛永九年)にイエズス會士マンシオ・小西、同パウロ・齊藤小左衛門、ドミニコ會士ディエゴ・デ、サンタ・マリア、五郎兵衛が薩摩に着き、翌年三月迄同地に留り、長崎に赴いた。^(註六)パードレ・五郎兵衛は、同年八月十七日、長崎で穴吊しに處せられ、^(註七)パードレ齊藤は十月二日同様處刑された。^(註八)パードレ小西の最後に就ては詳しいことは判らないが、レオン・パジェーは支那の文献に基き、彼は一六四三年(寛永二十年)頃信仰のため血を流すに至つたと推察してゐる。^(註九)著名な殉教者イエズス會士マルセロ・フランセスコ・マストリリも(一六三七年九月十九日)薩摩の海岸に着いたが、更に日向を指し、同地で捕へられ、長崎に拘引されて處刑された。^(註一〇)鎖國中の日本に生命を堵して潜入を敢行した最後の、而して有名な宣教師であるパードレ・ジョヴァンニ・バッティスタ・シドゥッティも、一七〇八年(寶永五年)薩摩の一島に到着したが、長崎、次いで江戸に送られ、一七一五年(正徳五年)十一月十六日吉利支丹屋敷にその生涯を終へるに至つた。^(註一一)

省て、薩摩のキリシタン教會は、徹頭徹尾受難の道を辿つた。サヴィエルの出立後、彼等は事實上見捨てられ、あらゆる繼續布教の試みは、好意的な領主をすら屈服せしめた佛僧達の反抗のため頓座するに至つた。血腥い迫害も行はれ、その前には領主の家族も免れるを得なかつた。而して日本が鎖國するに至つても、尙殉教の血は流されたのである。

註(一) *Litterae annuae Japoniae anni 1624 datae, Dilingae 1628, s. 77.*

(二) 茂野幽考著、日南切支丹史、京都、一九五一年、一六三—一九三頁。茂野氏は、島津家久の義母カタリーナと、永俊尼は同一人物であると推定してゐる。之は事實であらうと考へる。永俊は、日本側の文献によれば、家久の義母ではなく、家久の

嗣子光久の伯母と記されてゐる。寛政重修諸家譜（東京、一九一七年、第一卷、六五六頁）によれば、島津家久に妻女三名あり、第一は鎌田、第三は相良である。第二即ち、光久の母は、家久の姪、即ち、島津の名稱を保ち、同家の最高の家臣となつた弟忠清の娘であつた。忠清の妻は、一六二四年年報に述べられてゐるカタリーナに相違あるまい。日本側史料の述べるやうに、永俊が光久の伯母であつたならば、彼女はカタリーナと同一、従つて同時に光久の（母方の）祖母、且伯母（家久の弟の妻）と同一人物となる。かくて日本側史料と上記年報とは符合する。日本側史料が、永俊は光久の祖母ではなく、伯母とのみ述べてゐることは、何等重大な支障とはならない。より重大な支障は、永俊の姪が堅野であるといふ事情である。おそらく彼女は、島津忠清との結婚前に堅野と稱し、一方島津の室と稱したに相違ない。だが島津家譜は、家族の一員を明らかにキリシタンと稱し、島津家の反キリシタン政策の犠牲者とするのを避けんと欲したことは諒解できることである。

元男爵種子島家の墓地には永俊及びその娘妙身の墓と更に一基銘文のない墓が現存してゐる。永俊は一六四九年（慶安二年九月八日）に逝去した。墓碑銘によれば「是人於佛道決定無有疑」とあるが、種子島家正統系圖は、彼女がキリシタン信仰を守り抜いたことを明確に述べてゐる。彼女の娘妙身は一六六〇年（萬治三年十一月十六日）に死んだ。妙身はその墓碑に戒名を有つてゐるけれども彼女の母と同じく信仰を有つてゐたことは當然と思はれる。第三の墓碑は碑銘を有しないが、同じく永俊一統のキリシタン婦人の墓と思はれる。種子島家譜元祿十一年（一六九八年）十一月十四日の條に「前キノ喜入攝津息女名號頼死於難井上一即稟于官府」と記されてゐる。茂野、前掲、一八六一一九〇頁。

(三) 茂野、前掲、一三七頁。

(四) 同、一八一頁。

(五) A. Montanus, Gedenkwaerdige Gesantschappen der Oost-Indische Maatschappij in t'Vereenigde Nederland aan de Kaisaren van Japan, Amsterdam 1669, s. 439.

(六) Pages I, 767; 茂野、前掲、一三六頁。

(七) F. Cardin S. J. Catalogus Regularium et Secularium, Qui in Japponiae Regnis……ab ethnicis in odium Christianae

鹿兒島のキリシタン（ヨハネス・ラウレス）

（七五） 七五

Fidel.....sublati sunt, Romae 1646, s. 72; Pages I, 787.

(八) Cardim, op. cit. s. 74; Pages I, 793.

(九) Pages I, 879.

(一〇) J. E. Nierenberg S. J., Vida del dichoso y venerable Padre Marcelo Francisco Mastrilli, Madrid 1640, ff. 78 v.-84; Pages I, 827~839; 茂野、前掲、一三九頁。

(一一) シドットイの日本潜入及び死に就ては、サレジオ會士タシナリ師の研究がある。P. R. Tassinari S. D. B. in Monumenta Nipponica, Bd. V, n. 1 (Tokyo 1942), ss. 246~253: The End of Padre Sidotti. Some New Discoveries.

(松田毅一譯)

東京府内 區分繪圖

明治三年夏に 松迺展貫一校正で、須原屋茂兵衛の出版せる表題の如き地圖がある。本圖は綠色の題箋に東京府内區分繪圖全と記した折たたみ圖で、地圖面は西を上方にし、左下隅に東京灣を記載せる點に於て、從來の江戸圖の形式を繼承するもので、一三區を淡紅色に、三・四・五區を薄青色に、六區を薄黄色に塗つて居り區境線と區番號を紅で後刷りで入れて居る極めて平凡な地圖である。

(河北展生)

ところが、第二大區第三小區の中央東側、即ち芝新錢座町の部分に、江川、上田、兵部省操練所に圍まれた一劃に、「フクザワ」と記入してある。これは當時新錢座に居住していた福澤諭吉宅を示すものと思はれる。福澤の住宅は即ち慶應義塾の所在地でもある。この圖はおそらく江戸東京の地圖で、福澤諭吉及び慶應義塾の所在を示した最古の地圖ではあるまいか。猶同圖には三條、岩倉、大久保、木戸等の明治の元勳の住居をも記して居る。